

掃除や整理整頓が行き届いているオフィスや、「いらっしやいませ！」という明るい声が響き渡る店内。私たちは、そうした清々しい雰囲気には惹かれて、企業やお店に足を運ぶものです。

社内の雰囲気作りは、誰もが工夫をしていることでしょう。しかし、その際の心境面を大切にしている人は、どれだけいるでしょうか。

新人雑誌記者のAさんは、初仕事として、伊勢神宮やその周辺にある名勝旧跡を取材するよう指示されました。

Aさんは、以前に何度も伊勢を旅したことがあったのですが、今回は仕事ということもあり、下調べをした上で伊勢神宮とその近くにある「河崎」という町を取り上げることに決めました。

「河崎」は内宮から車で約三十分の場所にあり、終戦の頃までさまざまな問屋が軒を連ね、神宮の膨大な参拝客で賑わっていました。かつては「伊勢の台所」とも呼ばれ、今も古い蔵や商家が大切に保存されているレトロな町並みとして知られています。

取材当日、Aさんは宇治山田駅からバスに乗り込み、まず内宮へ向かいました。なんととしても面白いネタを見つけたぞ！と意気込み、目を凝らして車窓からの風景を眺めているうちに、フツと一つのことに気付いたのです。

駅前やその周辺には高層ビルやマンションがあるものの、内宮に近づくにつれて、なぜか高い建物が少なくなっていくのです。また、河崎への移動中も同じよ

伊勢-歴史を尊重する 恩意識が町を作る-



え・牧えみこ

うにビルやマンションがほとんど見当たらず、町全体が平坦なつくりという印象を受けたのです。

河崎に到着後、Aさんは地元商店の中では老舗として知られる陶器問屋W店の店主さん取材しました。町の歴史や昔の人々の暮らしがりの話を聞く中で、気になってきた「建物の高低」について質問してみました。

「昔からこの町では『自分たちはお伊勢さんのお陰で生活ができる』と考えてきました。伊勢神宮があったから参拝客が集まり、商売をすることが出来たのです。『高い建物を造る』ということとは、お伊勢さんを見下ろすことにつながり、神様に対して失礼にあたります。だから今も高い建物をなるべく造らずに、お伊勢さんを大切にしようとしているのです。店主さんはそう教えてくれました。W店の創業は一七五六年とのこと。それから現在に至る約二百年以上ものあいだ、親祖先からの教えを大切に受け継ぎ、神宮への感謝を忘れずに商売に取り組んできたというのです。

Aさんは話を聞きながら、伊勢神宮を大切にしながら続けてきた当地の人々の姿に感銘を受けました。そして、W商店が今日まで生き残ってきた要因の大きな一つに神宮への報恩の自覚に裏打ちされた「おかげさまで」の心情が間違いなくあると感じ、重点的に記事にもしたのです。

恩意識の高揚は働く意欲の向上へ通じ、その意欲は態度や雰囲気にも表われ、自ら運を呼び込む原動力となるのです。